

岡山市内で、ある病院勤めの私は、去年の秋、有給休暇を取って、朝早く車で妻と、芸の宮島参詣へ出かけた。途中、広島平和記念公園と広島県江田島の旧海軍兵学校を見学して、夕方前、宮島まで、後、僅かのところで、にわか眠気を催し、瀬戸内沿いの駐車場で運転席の背凭れを倒して仮眠をとろうとした。私は波の音を聞きながら、ほんのちよつと夢現を彷徨さまよって、夢の中へ誘われた。初め、夢と知りながら、昼間のような月明かりの中を夢中で走った。この時、四つん這いで走っていることに気付かなかった。

やがて、ぐったりと疲れ、大きな椎の林に囲まれた泉の畔でうずくまった。

そうして、夢を見ていることも忘れて、無性に渴きを覚え、泉で喉を潤そうと、掌を掬んで、はっとした。掌は泥だらけ。おまけに、手の甲、腕、足、胸、肩は毛むくじゃら。

私は月明かりで自分を水面みなもに映して確かめ、びっくり仰天、尻餅を搗いた。

水の底から大きな猿が私を見詰めているではないか。私は気を取り直して起き上がり、もう一度、確かめようと、怖々、そうっと水面を覗いた。びっくり眼の猿が訝しそうに、やっぱり私を見詰めている。私は試しに少し口を開けると、猿も真似て、少し口を開けた。それは水に映った私なのだ。

「そうだつ。夢なんだつ」私は、なにがなんでも夢から逃れようと頭の毛を掻き毟ったり、手の甲・腕・足を抓ったりしても、その気配は全くない。私は、本当は猿で、人間に懂れて、今まで人間になった夢を見ていたのださえ思い始めた。それでも、なんとか目覚めようと、やたら、そこら中を跳ね回って、私の名の山口良吉やまぐちりょうきちを、力いっぱい叫んでもみた。だが、けたたましい猿の叫び声が虚しく辺りに木霊こだまするばかりだ。

「……猿……」私は愕然と呟き、そう認めざるを得なかった。そうして、椎の根元に崩れ込み、木の間隠れの月を眺めながら途方に暮れた。しばらくして、東の空は僅かに明るみ、私は、なにやら気配を感じて頭の上を見上げると、太い枝の根っこで思い悩んだ面持ちの若い猿がうずくまって、大きな柿の実の小枝を片手に、じいっと私を見下ろしている。

私は、その猿を見上げながら、

「お前、だれだ？」と、尋ねようとした。猿の言葉など知らない私は、そう尋ねるつも

りで、取り敢えず声を発してみた。と、驚いたことにその猿は確かに猿の鳴き声なのだが、「よくお尋ね下さいました。……。ぼくは園部仁九郎そのべじんくろうと云うマクロス妙法会みょうほうかいの門徒で、正大党しょうだいとうの党員です」と、はっきり答えた。私はびっくり序に、また声を発して、続けた。「マクロス妙法会？……、正大党？……、一体、なんなの？」

「はい。マクロス妙法会は門徒一千万匹の新興宗教教団で、正大党はマクロス妙法会と表裏一体の政党です」仁九郎の言葉で私は日本の、ある新興宗教教団とその周りのことなどが脳裏を過ぎった。仁九郎は慇懃に続けた。

「あなたは思慮深い方とお見受けします。マクロス妙法会と正大党の話を、ちよつと聞いて頂きたいのですが、そこへ降りさせてもらっても宜しいでしょうか？」

「いいとも。……、思慮深いかどうかは分からないけどね」私は苦笑いした。

「はい。恐縮です」仁九郎はその小枝を啜えて、するするっと私の前へ降りた。

「どうぞ、お召し上がり下さい」仁九郎は小枝を私の前に置いて勧めた。

「有り難う。……。私、山口良吉。宜しく」

「ぼくの方こそ」仁九郎は、ちよこんつと頭を下げた。私は小枝から一つを挽ぎ取って、一口、齧かじった。快い甘さが、口いっぱいに広がった。私は柿を齧りながら続けた。

「ここ、なんて云うところなの？」

「太国たいこくって云う小さな国です」

「太国たいこくだつて？……。……そんな国、あつたかなあ……？」

「はい。確か、この辺りは、五億年ほど前、日本って云う……」

「五億年前に——っ？」私は柿を齧りさし、思わず素っ頓狂な声で仁九郎を遮った。

「はい？」仁九郎は訝しそうに私を見詰めた。

「じゃあつ、今、西暦何年なの——っ？」

「六億五百万一九五二年ですが……？」

「え——っ。六億五百万一九五二年だつて——っ？」

「はい、そうですが？」

「じゃあつ。……えくと、えくと……。……つ。今、六百五万二十世紀つてことつ？」

「はい。……。山口さまは、どちらのお方ですか？」仁九郎は、また訝しそうに小首を傾げた。

「……説明の付かないほど遠く……」私は安心して呟いた。

「……そうですか……」仁九郎は不服そうに呟いた。私は齧りさしの柿を漫然と掌に載せたまま仁九郎を見詰め、力なく続けた。

「マクロス妙……」

「はい。そのことです」仁九郎は異様な眼差しで身を乗り出し、私を遮って続けた。

「教団と党の目指すところが正しいとかそうでないとかの議論は別にして、教団と党のためのぼくたちなのか？それとも、ぼくたちのための教団と党なのか？……。なにがなんだか、さっぱり分からなくなって、家族を離れ、こうして、一匹で思い悩んで、だれかに聞いて頂きたいと思っているところです」

「……なんだか、難しそうな話だねえ……」

「……。ぼくは教団のことを、碌々、知りもしないで、恋人と彼女の両親と兄とに勧められるまま、一九一七年十月十日、祖母・両親・父の弟たちの猛反対をも押し切って、入信してみれば、教団は他宗旨宗派全てを邪教と決め付けて折伏を続け、一九〇九年十一月十七日には正大党までも結党して、民衆には珍糞漢糞の《王仏冥合論》おうぶつみやうごろんとかを振りかざし、政権奪取を目指して政界へ進出し、ぼくには一神教国家の実現を目指しているとしか思えません。そうして、婚約時代、妻のことを、『惚れてしまえば痘痕も笑窪』あばた えくぼの諺通り、惚れ惚れで入信から間なしに結婚しました。入信した以上、教祖日袁大聖猿と教団を一途に奉って、自らを厳しく律しつつ、荒んだ世の中の猿類救済を唯一の使命と、意を決し、敬虔な一宗教家たらんと、入信を渋るぼくの祖母・両親を妻とともに説得して入信させました」

仁九郎の告白めいた一言一言に私は心の中で、

「そんな話、確か、どこかで聞いたことがある」と、呟き、つい苦笑いした。

仁九郎は思い詰めた面持ちで続けた。

「ぼくたち一家が挙って入信した翌日には妻の親元一家がやって来て、数百年もの大昔から祀ってあった仏壇の位牌も、わが家の守り神として、大樗の根元に、永年、鎮座ましました祠ほこらの幣串までも魔物と魔物の住処などと称して、些かの躊躇ためらいもなく位牌や祠・幣串の類いは裏の畑で、綺麗さっぱり焼き払い、大樗は父が伐り倒してしまいました」

「いくら信仰のためだからと云って、昔からのものを焼いてしまったり、伐り倒してしまったりしなくてもよさそうなのに」

「門徒のぼくだって、そう思い……」

「じゃあ、なぜ止めさせなかったの」

「妻が、『魔物だの、魔物の住処だの』と、云えば、しかたないじゃありませんかっ。

「……っ。妻の両親・兄ですよっ」

「……そんなもんかねえ……？……、それで？」

「はい。それまでの仏壇は櫛しきみの葉を啣え、お清めと称して、その小枝を振り回し、曼荼羅を書いた大きな画用紙ほどの紙ッ切れをご本尊さまと唱えて、仰々しく奉り、『マクロス妙法会門徒は正月に注連縄しめなわもお鏡も不要』と、云って帰りました」

「……まッこと女房孝行だこと……。……その中、教団の会長から間違いない表彰されて、金一封が来るぞ……。……、……。……マクロス妙法会門徒の偉大なる鏡としてナ……。……」

私は真顔で、つい茶化してしまった。昔からの、本当に悪い癖だ。

「茶化さないで下さいよっ。ぼく、真剣なんですからっ」仁九郎は不機嫌そのものにカッと牙と眼を引ン剥いた。

「ごめん、ごめんっ」

「……。っ。その夕方、ぼくは位牌の影も形もない白い灰を片付けてたら、このまま塵芥として棄ててしまうのが忍びなくて、『本当にこれでよかったのか?』と、一種、悔恨とも云えそうな感傷の念が心を吹き抜けました」

「血の通った生き物なら当然じゃないの?」

「はい。……。ぼくはご先祖さまたちに詫びながら家近くの溪流へ流しました」

「……」

「以来、ぼくは、消化不良のまま大聖猿の教えとご本尊さまの功德を居丈高に振りかざして、今、考えれば、行き過ぎではなかったかと思うほど他宗旨宗派の不条理・腐敗振りを徹底的に詰り捲くって、強引な布教活動に、ひたすら妻ともども勤しみました」

「……いずこも同じ秋の空……。私もしつこく新興宗教門徒に勧誘されたことを思い出し、心の中で呟いた。仁九郎は続けた。

「ぼくたちは、最初、面白いように十数匹の入信勧誘に成功し、妻の両親・兄からも誉められて、大いに気をよくし、布教活動に邁進しました」

「幸先いいじゃないの?」

「ところが肝心の親類は、いくら説得しても、だれ一匹、入信勧誘に応じてはくれません。それどころか、ぼくたちを露骨に毛嫌いする素振りすら、見せるんです」

「……」

「ぼくたちは途方に暮れ、心は梅雨空のように鬱陶しい日々が続きました」

「なるほどねえ」

「そんな、ある時、ぼくが入信して、間なし、入信勧誘に行つて、うまくいかなかった祖母の姉あはねの孫まごで余部正也あまべまさやの兄貴のことが脳裏を過ぎました。最初の入信勧誘の時、彼は、

『宗教の正邪は、なにを基準に、だれが決めるんだ？ それに、お前らが魔物だとする仏像と、お前らの、ご本尊さまと称して有り難がってる紙ッ切れ一枚と、どこがどう違うんだ？』

一体、なんのために、それほどまで、門徒を増やしたがるんだ？ お前ら教団が最終的に目指すところは、なんだ？ よく分かるように説明してくれないか？』などと、次々に難問を浴びせ掛けました」

「彼ばかりでなく、みんなが知りたがってることだろうねえ」

「はい。……。ぼくが、『門徒を増やすのは大聖猿の教えとご本尊さまの功德でだれもが幸せになれるようにだ』としか、答えられないでいると、彼は、『そんな当たり前のことで、やたら、他猿に信仰を勧めるものではない。お前のことを称して、身のほど知らずと云うものだ』と、厳しく窘められ、その時は割りと穏やかに断われました」

「……ん……」

「その頃、彼は農産物相場の大暴落で膨大な借金を抱え込み、農業経営が極度に行き詰って、評判、甚だ宜しからざる状態になりました」

「……」

「そんな中でも、教団の日刊機関紙の妙法新聞みょうほうしんぶんには付き合ってくれていました」

「なかなか、いいところ、あるじゃないの？」

「はい。ぼくは幼い頃から、年上の彼のことを、『兄(あ)さん。』と、呼び親しんでいました。しかし、彼は昔からマクロス妙法会・正大党嫌いで、彼の故郷の祖母・母から確たる信仰を受け継いでいました。それに、彼の教団・党嫌いは、一九一五年に門徒と党員が教団と党を扱った言論・出版を妨害した事件で更に拍車が掛かったに違いありません」

「云えてるかもねえ。……。……って云うことは入信も選挙もだめってこと？」

「いえ。彼の地下内の門徒で彼の又叔父が亡くなって、ぼくたちが選挙運動で彼の家へ行くまで、彼夫婦の票は、選挙全て、その又叔父が支配してました。……。彼の話では、初め、自分の、教団・党嫌いを話して投票を拒むと、又叔父は、『了見違いするな——っ』と、いきなり座敷に上がり込んで、『お前ら、正大党に投票しなければ、ご本尊さまの罰が当たるぞ——っ』と、居丈高に脅しました。流石、彼、些かも脅えませんでした。」

でも、義姉の方は、すっかり脅え切って、彼に、『子どもたちに罰でも当たったら、大変だから正大党に投票しようっ』と、云うので、彼は、渋々、義姉と車で、投票所へは行っても、『マクロス妙法会や正大党など、胸ッ糞が悪いつ』と、投票しないで投票所の玄関

で待っていました。ある時など、投票所の係員から投票用紙を受け取ると、そのまま白票で投票したと云ってました」

「奥さんの心配は尤もだねえ。……。でも、彼は、折角、投票所へ行ったんだから、自分の思う候補者に投票すればいいのに？」

「そこんところがぼくにも分からないんです」

「ちよつと変わり者だねえ」

「そうですねえ。……。これが、結局、三十年以上も続いたと云うことです」

「夫婦には、尚一層、マクロス妙法会嫌い・正大党嫌いにさせた、将に恐怖選挙だねえ。

……。でも、又叔父さん、彼に入信は強要しなかったの？」

「はい。もう亡くなったけど、きっと、彼の祖母や母に対して義理が悪かったンでしょう。

……。又叔父は彼の祖母たちに、かなり恩義があつたそうですから」

「そんな彼を改信させて入信させるの、土台、無理なんじゃないの？」

「はい。今でも、彼は、『信仰を他猿に押し付けたり押し付けられたりものではない。

信仰は個猿の自由だ。そのことは憲法にも、ちゃんと謳われてる。だから、他猿さまの信仰をとやかく云う権利はだれにもない』と、自分の信念は、絶対、曲げません」

「当ツたり前。そんなの、格別、力んで話すほどのものでもない。……。きみ、教団と党に逆上せ上がってるみたいだけど、それで生活できるの？」私は吐き捨てるように尋ねた。

「ぼくの地下内で入信を断られた又従兄弟のとのだやせ殿田八十の山仕事に使ってもらって、なんとか生計を立てています」

「そう。こんな不景気な時代なのによかったねえ」

「はい。ぼくの入信で父の弟たちとは疎遠になつても正也の兄貴、八十とともにぼくたち三匹は互いの心を打ち割ぶって、それこそ血を分けた兄弟のように付き合っていました」

「……信仰で絆が結ばれるなら分かるけど、信仰で絆が断ち切られるとはねえ……」

「……っ。それはさておいて、ぼくは、こちこち石頭の正也の兄貴を、なんとか入信させられないものかと、いろいろと知恵を巡らせてみました」

「……絆より信仰……？」

「どんな手段でも、彼の入信勧誘に成功しさえすれば、彼は隣町の妹たち二匹も入信させるに違いありません。彼女たちは社交家で付き合ひも多いと聞いています。

ですから、彼女たちは夫たちの親類をも巻き込んで布教活動に励み、鼠算式に必ず門徒を増やして、彼の先輩門徒としてのぼくの地位も飛躍的に向上するものと確信しました」

「……そんなもんかねえ……」

「……。そう思うと、ぼくの心は、にわかにときめき、五月晴れのように晴れ上がる思いで、早速、ぼくは改めて彼のところを訪れました。そうして、口を極め、彼の信仰を詰り捲くって、大聖猿の教えとご本尊さま以外は魔物か、まやかしものだから、早く目を覚まし、勇気を持って信仰を改め、教団へ入信する旨を懇々と説きました」

「それで、彼は？」 私は、思わず身を乗り出した。

「彼、あの時とは打って変わって腕組みで黙りつくく聞いていました。

……。ですから、『絶対、入信の意思ありっ。』と、期待しました」

「……ん……っ」

「ところが、彼は言葉も荒々しく、やがて、『そんな勇気なら、喜んで願い下げだっ。

第一、信仰に魔物も糸瓜へちまもあるかっ。信仰とは生まれたてのガキにとつての母親だっ。

だから、母親が魔物であろうが鬼であろうがガキは母親の乳首に武者振り付くじやないかっ。それは将しく欠け替えのない命の素の、ただ一匹の母親だからだっ。

お前ら、《魔物っ。魔物っ。》って、馬鹿みたいに囀なやり捲くってるけど、ほんとに魔物を見たのかっ？ 見たなら教団の名誉会長だかなんだか知らんだが、来る日も来る日も狒ひむらしょうた村狸太を誉めそやすばかりの能なし新聞に、『どこそこ大魔物が現れました』って、魔物の大写真入りで、大々的に載せたらどうなんだっ？ 大体、お前らの云う魔物の記事が新聞に一行でも半行でも今までに載ったことでもあるのかっ？ ……っ。性根据えて答える——っ』と、拳を震わせ、大声で怒鳴りました」

「云えてるっ、云えてるっ。……、でっ？」

「はい。ぼくの、『勇気を持って云々』が癩かに障ったのは確かです」

「そうだろうねえっ」

「ぼくは己が信仰に固執する彼を説得して入信にまで漕ぎ付けけるのは並大抵でないことを改めて思い知り、ぐうの音もありませんでした」

「……っ」

「云われてみれば、一言一言が野ッ原でぼくたちが排泄した野糞のぐそを突き付けられた思いでした。腹立ち紛れの彼の言葉は乱暴ながらも、尤もな道理にぼく如きが挑んで彼を論破することなど、到底、思いも寄らないことで、教団の論客でも指し向けて論破する以外にないと思いました。そうして、いつか幹部にそのことを相談し、彼が捲くし立てた諸々のことで教えを乞おうと思いつながら、彼の家を這々の体で退散しました」

「……他力本願だねえ……」

「その通りです。……。しかし、例え、彼を論破することができても彼が入信するかどうかは全く別問題です」

「それはそうだ。議論に負けたから入信しなければならぬってことないからねえ」

「はい。いつだったか、彼は二十世紀頃の人間伝説で東京裁判(極東国際軍事裁判)の不条理を穿り出し、痛烈に批判した小文を新聞・雑誌に投稿して掲載され、各方面から大いに共感されて、最近、界限で右翼とまで評される煩型うるるまがたです」

「あの東京裁判を無責任な伝説にしてしまっただけではないんだっ。絶対、検証しなくてはいけないんだっ。私は無性に焦りを覚えた。仁九郎は続けた。」

「……。確か、一九三〇年頃の五月か六月のことだったと思います。郡支部門徒の志気高揚を図って、県支部の幹部をお招きし、講演会が隣の公民館で催されることが本決まりになりました」

「それで？」

「ぼくは彼を正面から入信さようとしても無駄と諦め、搦め手からからでも入信させようとして、いろいろと策を練りました。しかし、彼の信念を根底から覆すほどの妙案・妙策は考え付きません」

「……」

「思案投げ首のぼくは、ある座談会の後、多くの猿を入信させた郡支部の最古参でみの先輩に相談すると、先輩の言葉は、『真っ先にするべきことは、余部さんを拝み倒してでも、とにかく座談会にご足労願うことだ。然る後、じっくりと話しを聞いてもらって、納得の行くまで質問してもらったらいい。……。私の経験上、座談会に来てもらえたら、半分以上は成功。質問をしだしたら教団に興味を持った証拠だから、粗方、成功と思って、まづ間違いない』とのことでした」

「丸っ切り、鼠講の勧誘じゃないかっ」私は、瞬間、背筋を冷たいものが駆け抜け、四・五年前、同窓生にこんな方法で訳の分からない勉強会に連れて行かれ、危うく鼠講に入らされそうになったことを思い出した。仁九郎は続けた。

「ぼくは、心の中で、『あの石頭、どうやって座談会に引き摺りだすんだっ？』と、何度も繰り返して、先輩を見詰めました。きつと、思い詰めた表情だったに違いありません。

先輩は眼差し鋭く皺くちやの骨張った手で、突然、ぼくの手を固く握り締め、『いいかっ。とにかく座談会に来てもらえっ。でなければ、私たちだって後押ししようがないじ



やないかつ。余部さんが来られたら、みんなで、精いっぱい後押しするから、同志を信じて、入信してもらえるまで心強く頑張れっ。大聖猿とご本尊さまの功德でうまく行くからっ』と、熱っぽく励ましました」

「それだけ喉けしかけられたら、やる気にならざるを得んねえ」

「はい。ぼくは魔術にでも掛かったみたいに闘志が湧きました。そうして、『よろしっ。これしかないっ』と、一策を案じ、思わず奥歯を噛み締めました」

「一策？」

「はい。それは、当日までの数回の座談会で、なんとしても教団に興味を持たせ、熱気溢れる講演会会場のムードと幹部の熱い講演で、がっちりと彼の心を掴み取り、同志の力強い後押しで、そのまま一気呵成、入信に誘い込むと云うものでした」

「それじゃあ、どさくさ紛れの騙まし討ちじゃないの？」

「そうかもしれません。でも、ぼくは、『どうか、うまくいってくれっ』と、ただただ念ずるだけで、彼を騙まし討ちしようとしていることに些かの疾しさもありませんでした」

「信仰熱にうなされるって、そんなもんかねえ？……。戦国時代じゃあるまいし、親しい友を騙まし討ちするなんて、猿のやることじゃない」

「今、冷静になって考えれば、確かにそうだったかもしれない」

「そうさっ。それ以外、なにがあるっ。きみ、良心を踏み躪ろうとしてるんだぞっ。」

分かってるのかっ。……っ。猿の心を踏み躪ってまで、なにが信仰だっ」私は、つい興奮して、この時、人間と云う意識が完全に消え失せていた。

仁九郎は哀願するように続けた。

「分かってくださいっ。入信勧誘には行き詰るし、あの時は、あれしか、方法がなかったんですっ」

「じゃあ、聞くんが、きみら門徒は布教のために折伏ばかりか、なにをやってもいいとでも云うのかっ？えっ？……っ、どうなんだっ？」

「……そんな訳じゃありませんが」仁九郎は、伏し目勝ち、肩を落とした。

「まあ、いい。……、先を続け給え」

「申し訳ありません。……。家に戻ると、早速、ぼくは当日までの座談会を調べました。

ぼくにとつて、起死回生の賭けでした」

「教団は門徒にそこまで強いるのか？」

「どうか誤解しないで下さいっ。……っ、ぼくの意志で……」

「どっちにしたって、きみをそこまで追い詰めたのは、間違いなく教団じゃないのか」  
私は仁九郎を遮って決め付け、仁九郎は悲しそうに私を見詰めて続けた。

「とにかく、もし失敗すれば、彼の怒りを買って、これまでのように付き合ってくれないばかりか、八十にしたってぼくのことを、『教団のためには手段を選ばない卑劣な奴』と、この先、山仕事に使ってくれるかどうか分かったものではありません」

「それは、そうだっ。そんな卑劣な奴、自分のところで使うことないものっ」

「それから、数日後の晩、村レベルの座談会があるので、ぼくは野良仕事から急いで帰ってみると、妻は昼過ぎに届けられたと云う豪華な大本棚を、教団ではカリスマ的存在で名誉会長先生著の膨大な『猿類革新』えんるいかくしん全巻と、その他教団関係の数冊で飾り立て、傍らでいっになくニコニコと上機嫌でした。ぼくは、さぞや高価だっただろう買物に苦笑いし、ご本尊さまにお祈りして大きく深呼吸し、電話口に向かいました。もちろん、座談会への出席依頼で彼に電話するためです。先方の電話口は彼で、第一声は語気強く、『またマクロス妙法会に入れかつ?』でした。ぼくの予期通りで、別段、うろたえませんでした。

でも、今にも電話を切りそうな彼の不機嫌振りは、十分窺えます。ぼくは、『違うっ。違うっ』と、懸命に否定し、『頼むっ。マクロス妙法会に入れとは、絶対、もう云わんから、わしの顔を立てて、座談会の頭数むたまかずだけ揃えに来てくれんかつ』と、頼みました」

「うまく誘いに乗ったの?」

「はい。不承不承ながらも、なんとか」

「そう」

「こんなことが、三・四度あり、彼は、ただ親類・友の誼で、その度に座談会へ付き合ってくれて、同志たちに囲まれ、和やかに話していました。きつと、入信を勧められていたのでしょうか。その頃からぼくは些か良心に恥じ、そんな彼に疚しさを覚えました」

「……だろうねえ……」

「講演会数日前の座談会の帰り際、彼が座談会に来るようになった経緯いきさつを知らない若い♀同志は彼の後ろ姿を眺めながら、ぼくに小声で、『かなりの線、行ってるじゃないの』と、首を竦めて微笑み、ぼくは苦笑いで頷きました。すると、彼女は、『後、一押しっ。頑張ってっ』と、ぼくの肩をポクンと叩いて帰りました。講演会の当日、もちろん、彼を誘いました。その折り、幹部の控え室で同志と、彼に尋ねられた教団の最終目標などをお尋ねしました。幹部は、『美・利・善』の価値を創造することによって幸福を追求する過程で猿類が真の生甲斐を体感し得る第三文明の世界を実現することだ。』と、小難しい理論を

得々と優等生然として説かれました。しかし、幹部はデパートのマネキンボーイさながらに余りにも杓子定規で流暢過ぎ、講演にしても、名誉会長先生の講演を初めて聞いた時ほどの感動も感激はありませんでした」

「カリスマッて奴ら、ふしぎに演説がうまいものさ。ヒトラーだってそうじゃないか？」

「ヒトラー？……、ヒトラーですか？」

「まあ、いい。……、で？」

「はい。それでも、講演前の質問中、臆げながら分かったことは、『第三文明の世界の現とは、第一文明の世界から第二文明の世界へ踏襲され、第三文明の世界へも確かに踏襲されるはずの多くの他宗旨宗派による常識・慣習・文化を根底から否定・打破し、大聖猿の教えと教団の教義のみに基付いた第三文明の世界概念を具現化すること』と、云うことでした」

「なるほど。それなら、私にも幹部の云ってる意味が分かるような気がする」

「この時、ぼくは、『もし、そうなれば、わが国は日袁聖宗のみの一神教国家になり、全国神社・仏閣・仏像の類いは魔物、魔物の住処だとして、ぼくの家之位牌や祠が焼き払われたように、ことごとく破壊されしまうではないか？』と云う疑問に突き当たり……」

「疑問じゃないさ。……、考えても見給え。教団が他宗旨宗派を邪教と決め付けてる以上、道理的にそうならざるを得んだろ？……。もし正大党の天下になればだがね」

「このことは幹部に確かめませんでした。しかし、これまで、わが国に一神教の国々のような宗教騒乱がなかったのは多宗旨宗派の乱立、つまり、『団栗どんぐりの背競べ』の力の均衡に他なりません」

「確かに云えてる」

「昔から、国民の大多数は正月に神社へ初詣し、亡くなれば檀那寺のお世話になって、先祖代々の墓地へ葬られます。そうして、お盆には、だれもお墓にお参りします。

その上、いつの時代からか、西洋文化のクリスマスも、なんの違和感もなく祝われようになり、教会堂で結婚式も行われるようになりました。……。入信以来、ぼくは他宗教宗派を邪教だの魔物だのと、折伏の布教活動に勤しみながらも、それらの慣習・信仰に、なんの違和感も覚えません。今では、だいぶ慣れましたが、正月、わが家の玄関に注連縄がないことと床の間にお鏡がないことに、寧ろ違和感を覚えます」

「なるほど」

「ある時、子どもたちが、『Kちゃんの家は注連縄やお鏡さまを飾ってるのに、なぜ、

家は飾らないの?』と、寂しそうに尋ねたことがあります。その頃、教団門徒は、今でもその傾向はありますが、世間から白眼視されていたので私は返答に窮しました」

「……かわいそうに……。……。……お子さん、さぞ肩身の狭い思いだったろうねえ……。」「はい。これらは、ほんの一例ですが、教団の教義との矛盾はカリスマの名誉会長先生なる強大な存在が辛うじて表面化させないでいます。しかし、一頃、六十以上もあつた国会での正大党の議席は、今や二十幾つしかありません。『月満つれば即ち虧<sup>か</sup>く』の諺通り、ぼくの周りからも脱信者が増え、彼などは、既に崩壊が始まっていると云つて憚りません」

「……どんなもんかねえ……。……。彼の入信勧誘、どうなったの?」「あ、そうでした。……。ぼくの判断で、『機、熟したりっ』と、講演会から数日後の晩、父を先鋒に同志五・六人で彼の家へ入信勧誘に行きかせました」

「じゃあ、きみ、行かなかつたの?」

「はい。彼の約束を破つてるんだから、いくらなんでも、ぼくは……。」「流石に良心が咎めたんだね。……。で、うまくいったの?」

「いえ。家は義姉と子どもたちだけで、義姉が、『今、主人が留守ですから、とにかく今夜はお帰り下さい。』と、断られ、座敷には上がらせてももらえなかつたそうです」

「奥さんとしたら、きみが約束を破るとは夢にも思わなかつただろうし、第一、お父さんたちに大挙されたのが怖かつたんじゃないの?」

「確かにそうでしょう。加えて、その時、父が拙いことをやってしまったって、結局、彼一家を更に大の教団嫌い・党嫌いにしてしまったんです」

「と云うと?」

「父が、『門前払いされたっ』と、腹を立てて、居間の子どもたちには、絶対、聞かせられない悪口雑言を義姉に対して浴びせ捲<sup>ま</sup>かつたんです」

「いくら腹が立つてても、子どもさんたちの前とはねえ」

「はい。でも、その数日後、母と妻が隣のスーパーで彼に出会つて、父の悪口雑言を詫<sup>わ</sup>びたら快く赦<sup>ゆる</sup>してくれたそうです」

「よかつたねえ」

「はい。こうして、絶対の決意で臨んだぼくの布教活動がままならないで思い悩んでいた時、妻の兄も妻も、『マクロス妙法会門徒たるもの、自分は、今、なにをなすべきかをよく考えて行動するべきだ』と、懇々と教え諭しました。ぼくも、その時は、『なるほど、尤もだ』と、甚<sup>いた</sup>く感じ入つて、また布教活動に勤しもうと、決意を新たにしました。」

……。でも、決意した、そのすぐ後から、妻の兄や妻のように、すっかりとなにもかも割り切って教団のために突き進むのが猿なのか、それとも、ぼくみたいに、うじうじ思い悩むのが猿なのか、すっかりジレンマに陥って、なにもかも分からなくなりました」

「将しくジレンマだねえ」

「はい。……。それから間なしに、ぼくは発狂し、『親父は魔物だつ。打ち殺してやるつ』と、大鉞まさかりを振り回して喚き散らしながら恐怖に逃げ惑う父を追い回し、八十始め地下衆に取り押さえられました」

“悲劇っ”

「妻は、『大聖猿とご本尊さまとを、一生懸命、拜んで、絶対、治して見せるっ』と、云い張って、ぼくを精神科病院へ入れることに猛反対しましたが、とうとう、ぼくは、みんな病院に放り込まれ、一年近く入院しました」

「すっかり、よくなったの？」

「はい。……。でも、いつ再発するか、不安な日々です」

「心配だねえ」

「はい。有り難うご座います」

「……。正也くんの方、どうなったの？」

「ぼくの祖母が亡くなるまでの数年間、行き来いききは、全く途絶えてしまいました」

「……。つまり、絶縁状態……？」

「はい。……。でも、彼夫婦は、祖母の葬儀万端、とてもよくしてくれたので、夫婦は父の一件を水に流し、心から赦してくれたのだと思いました」

「で？」

「はい。ぼくも妻も、すっかり気をよくして、度々、彼の家に入信勧誘と選挙運動で赴き、やっぱり断られました。……。それでも、新聞だけは付き合ってくれました」

「……。『手を換え、品を換え』だねえ……」

「はい。……。余談ごとですが、数年前、父の葬儀の折り、父の弟四匹の一匹で都会に住んでる叔父はぼくたちの入信と位牌諸々を焼き払ったことが不満で弔問にも帰って来てくれませんでした。葬儀準備を手伝ってくれた他の叔父たちだって表情に表さないだけで、きつと、その叔父と同じ気持ちだったに違いありません」

「そうだろうねえ」

「父の葬儀の後、八十の父は自分の家に戻って、『あの家は仁九郎の嫁に、すっかり掻

き回されてしまった』と、ひどく嘆いていたそうです」

「……」

「ぼくは入信して、確かに大勢の門徒同志に恵まれました。しかし、教団の組織活動下とは云え、義理・猿情を蔑ろにしてまで、行き過ぎとも思える強引な布教活動・選挙運動で欠け替えのない親類の絆をずたずたに断ち切って心を踏み躪り、付き合いは殆どなくなつて寂しい親類になつてしまったのも、また確かです。……。一匹、こうして静かに考えれば、教団の門徒である前に猿としてなにをなすべきかより、どうあるべきかに到達します」

「それほどまで、教団に尽くして、一体、なにほどの意味が……」

「意味っ？……っ。意味など、必要ありませんっ」仁九郎は力を込めて私を遮り、自分自身に云い聞かせて、納得させようとするかのように答えた。

「……っ」

「第一、意味など、律儀に考えてたら布教活動も選挙運動もできませんっ」

「……そんなもんかねえ……。……。その後、正也くんとは、どうなってるの？」

「はい。……。ある時、ぼくは親類の同志と、口達者な彼を、なんとかやり込めるつもりで彼の家を訪れました」

「……ん……」

「ぼくは同志がいるのを幸い、口角泡を飛ばし、調子に乗って他宗旨宗派を詰りながら景気よく教団の『現世利益』げんせりやくを打ち上げました。黙然と聞いていた彼は、皮肉たっぷり、『じゃあ、門徒になったら、金は独りでに貯まるし、癌や脳卒中に罹かかったり、交通事故に遭あつたりはしないのか？』『現世利益』とは、それ以外、なにがある？』と、尋ねるのです」

「うまいうまいっ。全く小気味いい皮肉だっ」私は腹を抱えて、つい大笑いした。

「そんなに笑わないで下さい。……。屁理屈ばかり捏ね回して、ぼくたち、あの石頭には、ほとんど手を焼いてるんですから」仁九郎は生氣なく私を見詰めて続けた。

「ぼくが、『いくら門徒でも、癌や脳卒中にも罹るし、交通事故にも遭つたりもする』と、答えると、空かさず彼は、『だったら、他の宗旨宗派と同じじゃないか？』と、馬鹿にし切

……っ。殊更、有り難がつて奉るほどのものでもないじゃないか？』と、馬鹿にし切つて腹が立つほど笑うんです」

「いくら笑われても、確かにその通りじゃないの？……、それできみたちは？」

「はい。ぼくは返答に困って、苦し紛れに、『ところが、病気や事故でも軽くすむし、病気にしても怪我にしても医者がびっくりするほど、治りが早いんだ』と、答えました」

「それで？」私は今にも嘖き出しそうなのを堪え、先を急かせた。

「はい。そしたら、彼、『嘘、吐けっ。そんな馬鹿なことがあつて堪るかっ。』

もし、それが本当だったら医者なんかに掛からず、ご本尊さまを拜んで拜んで拜み捲くつて、なぜ治してもらわないっ？……っ、冗談も大概にしてくれっ』つて、また大笑いして、『結局、気遣いみたいにお前らの有り難がってるマクロス妙法会と他宗旨宗派とは、どこがどう違うんだ？』と、尋ねました」

「で？……。きみたち、なんて？」

「はい。』とにかく、入信して研究すれば教団の偉大さが、よく分かる』と、答えました」

「そんなことで、彼、納得しないだろ？」

「はい。その折り、父の悪口雑言の話が出て、ぼくが、『あれは、大勢の門徒衆の前で親父たちを門前払いしたお義姉さんが悪いんだ』と、云つたら、彼、しばらく懽然とぼくを見詰めていました」

「……っ」

「……。やおら、彼は、『お前らとは、これで議論を尽くした。もう、これ以上は堂々巡りで無意味だ。お前らの常識とわしの常識とは、だいぶ違うようだから、以後、親類としては付き合うけど、教団と党に関しては新聞も付き合えない。だから、それに関したこと、金輪際、家には来てくれるな』と、はっきりと断られて追い出されました。」

「彼としたら、当然の云い分だろ？……、別に問題ないじゃないの？」

「それはそうですっ」仁九郎は眼を引ン剥いて、にわか言葉調子を荒げた。

「……ん……。……。で？」

「入信云々は別にしても、選挙と新聞に関して、ぼくの立場は、全くありませんっ」

「つまり、上層部に対して、きみの顔、丸ツ潰れ？」私は仁九郎を見詰めた。

「そうですっ。……っ。親類なんだから、せめて、選挙と新聞くらいは付き合ってくれてもよさそうなのにつ」

「しかし、彼、『マクロス妙法会も正大党も大嫌いだ。』と、きっぱり云ってる以上、しかたがないじゃないの？」

「その通りですっ。……っ。でも、それを考えると、腸はらわたが煮えくり返る思いですっ」

「入信勧誘に失敗した上、選挙までとは、きみ、散々じゃないの？」

「全くっ。……っ。あの石頭が入信したら、ぼくの人生も少しは変わったと思うと、

思いッ切り打なぐン殴なぐつてやりたいっ」仁九郎は眼を、カツと見開き、牙を剥いた。

「で？」私は仁九郎を見詰めた。

「彼との一件を同志に話すと、今後、新聞と彼の票は、もう望めないにしても義姉の票だけでもなんとか確保しようと、義姉の親元近くに住んでいた知り合いで他の選挙区の門徒S女史を頼んで義姉に接触してもらい、昔の誼で義姉の票だけでも確保できました」

「よかったじゃないの。」

「ところが、その後が拙かったんです」

「また？……。今度は、なにを？」私は苦笑いした。

「はい。S女史は義姉の故郷に住む同級生でYさんの住所を義姉から聞き出し、Yさん宅へ正大党からの候補予定者Eを連れて押し掛け、『余部さんの奥さんのご紹介で参りました。この度の町会議員選挙には、どうか、このEを宜しくお願いします。』と、しつこく頼んで帰ったそうです」

「ちよつと確かめるけど、奥さんは、実際、そんなことしたの？」

「いいえ。Eとは、なんの面識もありません。第一、彼同様、教団や党嫌いの義姉がそんなことをしてくれるはず、絶対、ありません」

「じゃあ、詐欺じゃないの？」

「はい。……。義姉の、教団と党嫌いを知ってるYさんから、その晩、確認の電話があり、義姉は、『ほんとに申し訳ありません。迂闊にもYさんの住所は確かに教えました。』

「だけど、私はマクロス妙法会も正大党も大ッ嫌いだから正大党の応援めたことは、一切、しません。第一、Eさんのことなど、なにも知りませんし、聞くのも今が初めてです』と、はつきり答え、傍らで聞いていた彼は、『どこまで、わしらを舐めたら気がすむんだっ。』

「そもそも、お前があいつらに甘い顔ばかりするから付け上がるんだっ。」

「今度と云う今度、マクロス妙法会と正大党を、絶対、告発してやるっ』と、随分、息巻いていたそうです」

「状況的には告発されてもしかたがないねえ」

「全くです。今までは親類の誼よしみで、どうにか我慢してくれてたけど、今度は相手が他猿だからやり兼ねはありません。……。いや、社会正義のためと称して喜んでやるでしょう」

「もし、告発でもされたら、きみたち、拙いんじゃないの？」

「はい。……。でも、争いごとの嫌いで賢い義姉のことです。あの石頭ぐらい、なんとか、うまく丸め込んでくれるでしょう。……。ぼく、自信を持って云えますっ」

「……うーん……。……。今一つ、疑問なんだがねえ？」



「はい。……、なんででしょうか？」

「きみたち、奥さんとは議論しないで、彼女一匹の票に拘ってるのは、彼が死んだ時のために、彼女の入信勧誘の切っ掛けだけは、なんとしても残しておく魂胆じゃないの？」

「それはありません。それに、いつだったか彼は凄まじい剣幕で、『わしが死んだのを、勿怪の幸い、女房の入信勧誘に、絶対、来るなっ。もし来てみるっ。地獄から這い出ても、お前ら、呪い殺すぞっ。子どもにも親類中にも、≪女房をマクロス妙法会と正大党から守ってやってくれ。≫と、固々、遺言しておくつもりだからなっ』とまで云いました。

「……。ここまで徹底されれば、もう取っ付く島はありません」

「よくよく嫌われたもンだねえ」

「残念ですが、その通りです。……。彼と関係ありませんが、ぼく、名誉会長先生のこと、どうしても分からないんです」

「なにが？」

「旅費などは教団の金か、ご自分の金かは知らないけど、先生夫婦は平和の使徒として、絶対、行かなければならない紛争中の国々には行かないで、鉄砲の弾の、全然、飛んでこない国々にばツかり行って、年がら年中、名誉会長風を吹かせ捲くり、腐るほど勲章をもらって、にこにこしてるけど、あれで本当に平和の使徒のつもりなんでしょうか？」

「さあ？……。本猿、どう思ってるのかねえ？」

「分かりませんねえ？……。もし、そう思ってるンだったら、平和な猿ですなえ」

「じゃあ、今度、出会ったら、直接、本猿に確かめてみるといい」

「……、そうします」仁九郎は、くすつと肩で笑った。

その時、私は妻に揺り起こされ、車を出て、金色の夕陽を真面に浴びながら、ぐうっと一伸びした。

(終わり)